

児童教育学科生の音楽意識から観た音楽教育のあり方

——ピアノ領域への展開——

窪田千恵子（音楽）

序

幼稚園教育の目標として「生きる力」の育成へと方向づけられた。その育成の基礎に携わる保育の援助者を目指す学生自身は、どのように「生きる力」の意味を受けとめ、学生自身もどのように「生きる力」を養われているであろうか。現代の即応性を求める気質を感じ、「紀要18号」で、ピアノ教育からの意識調査において、学生の音楽に関する意識に興味をもち、音楽の視覚化による方法などを用いて、学生の音楽（ピアノ）に対する意識の変化を考察してきた。その後も数年さまざまな方法を用い、音、音楽と文章内容の関連や、他に向けた総合性へと発展、展開へと試み、ピアノ教育の一分野に含まれた奥の洞察を感じさせることに向けた。

技術、知育偏重の時代から、心の時代、創造力、社会体験へと総合的な学習に向けた教育方針が出された。

では昭和55年代に生まれ、メディアの渦の中で育った若者の音楽感はどのように育っているか。音響機器により、でき上がった「リズム、テンポにのって楽しんでいる。確かに現代の若者のリズム、テンポ感や、情報に対して敏感に反応する感覚と、さまざまな事や物に対する批評などの言語表現は発達し、感受性も豊かであると感じられる。しかしその反面、実践面として、物事を創り上げようとする工夫、創造性に関する未熟な面とのギャップを感じ、音や音楽に対してどのように捕え、またメディアで培った感性が生かせるか、さまざまな方法で考察に向けた。

調査対象

児童教育学科生 約80名

方法

方法(I) 音楽絵本

方法(II) 音楽劇

方法(III) 童謡からの発展

方法(IV) ピアノの一分野への表現展開

方法(I) について

「音楽絵本」

好きな童話を選択させ、内容に音楽や効果音を入れ、モノドラマにする。

製作プログラム

- ① グループ別け
- ② 題本選び
- ③ 台本作り
- ④ 音楽、効果音
- ⑤ 役割り分担
- ⑥ パート練習
- ⑦ 通し練習
- ⑧ 発表

方法(I)の結果と考察

①グループ別け

1グループの人数が多すぎて、一人の役割りが少なく退屈したり、また少なすぎて一人の役割りが多く負担になったりと失敗の結果、一グループを4～5人にした。他に友達同士などの相性もあり、浮き上ったりする学生もあるので、指導者はグループ別けを学生にまかせきりにせず、履修歴も含めて配慮することが必要である。

②題本選び

事前に口頭で内容や音、音楽の効果を例を出して説明したが、「解るけど、どこからどのようにしていいのか解らない」と、この段階では自主的に次の行動に移せる者は少ない。

そこで指導者側から、例として本を数冊用意する。しかし過去の失敗例として、絵本のみを選び、音楽に関しては他の曲集から選んだため、かなりの時間を費やしたので、音楽付き絵本にした。この数冊の例により授業内容を把握し、提示された数冊の本の中に気に入ったものがないと、図書館や書店、または子供の頃から所有している本などを思い出し、探して持ってくるなど自発的になってくる。

③台本作り

原作を10分にまとめ、音楽を入れることにより、約15分の作品に仕上げることにする。授業時間の少なさもあるが、幼児の集中する時間の限界などを説明する。

短縮させることにより、文章内容の目的、形容などの不明な部分など話し合い、指導者も質問形式で、「いつ、どこで、だれが、何を?」と方向付けや気付きを与える。この体験から国語として考えはじめた。

④台本に音楽、効果音入れ

指導者自身が指導に不慣れな時期は、学生の音楽履修レベルを理解することのないまま絵本のみを与え、他のいろいろな表現曲集の中からイメージに合った部分を選曲させていたが(学生自身で編曲する基礎力がないため)、読譜力の弱い学生にとっては苦痛であり、また選曲にかなりの時間を費やし、ピアノの上達した学生にまかせていることが多くみられたため音楽付き絵本にした。

⑤割合分担

この段階については学生同士にまかせる。

⑥パート練習

この段階からそれぞれにパート練習に入るが、やはりピアノやエレクトーンなどの鍵盤楽器を主に使用している。練習状況を見ると、譜面通りに弾こうと苦慮している。難しく思うように弾けない。そこでアドバイスとして、

「メロディー役と伴奏役と分けて2人で弾く、または簡易伴奏や鍵盤楽器ばかりではなく、内容の雰囲気合った他の楽器との組み合わせなどの応用例も示し、身近な簡易楽器や打楽器、リコーダー、その他、種々の楽器を並べ音色を考えさせた。

後記の学生の気付き、感想の一文に「音楽は一作品を譜面通りに仕上げるもの…」という固定観念が強くある。(学ぶためには必要であるが、)

⑦通し練習

半期授業であまり時間のないこともあり、また他の理由として、今日の学生は、全体把握をしないままに与えられたことのみを行い、自分の分担がどの様な必要性をもって結びついているのか考えないことが多い。そのため、自分の受け持つパートの作品中での役割りの意識付けをさせるため、パート練習不足であっても、ナレーションを共に通し、全体と自分のパートの関連を自覚させる。

参考観賞

この間に参考観賞として、ディズニーのアニメーション「白雪姫」を観せた。

観賞前に観賞法の意識付けとして、音楽、効果音、内容、画面が一体である総合芸術であり、その場面の動き、状況などの音の使い方などを研究例として観ることを指示した。

この作品の最後に制作の舞台裏が録画されているので、参考にした。

学生の観賞意識を観察して一音楽履修歴の少ないグループに授業前に観せた。観賞法を説明したにもかかわらず「かわいいー」と楽しんで、参考として観る者は少ない。他の履修歴の少ないグループに制作④で見せたら効果的であった。各グループの課題の全体像が明瞭になってきた時、研究としての観賞ができるのであろう。最初の授業前に観せたグループは、やはり制作④のあたりで、もう一度ビデオを観たいといい、こんどは真剣に観察していた。

音楽履修歴の長い学生は、やはり長い間培われた感覚であろうか、いろいろな角度から観賞、観察しているようであった。

指導者は、学生の性質、レベルを判断し、それに相応する臨機応変ともいべき応用力を持って指導しなければ、未経験者には難しく感じさせ、また経験者には退屈させることを改めて痛感した。

⑦のその後の授業は、音楽、効果音を入れて通したことにより、音の効果でイメージがより浮び上がったのであろうか、「間が悪い、音色が不自然…」などと意欲的に自分達で音を捜し工夫している。この時点になると、今までに観られない自発性、応用性がでて、効果音も身近かな生活の中から気付き、活用し、各グループが敗けまいとばかりに楽しんでいった。

ナレーションに関しては、慣れていないことや、はずかしさもあり、棒読みになり、また、内容、音楽と一体化することは難しい。

そこで指導者は「人形セラピー研究会」において教わったことを用いた。(人形を媒介とすることにより、自分自身ではなく対象になることによる心理効果) 自分自身ではなく物語の世界であり、主人公である。という。

その後のナレーターの上達はめざましく、またナレーターの表現力の変化により相乗効果で、内容と音の同質性を感じとり、より盛り上ってきた。

写真①「ピーターとオオカミ」

使用楽器

ピアノ—メロディ

鉄琴—メロディと効果音

風船—アヒルの鳴き声

水—池の水音、アヒルの泳ぐ音

タマゴパック—玉子のわれる音

新聞紙、傘—鳥の羽ばたく音

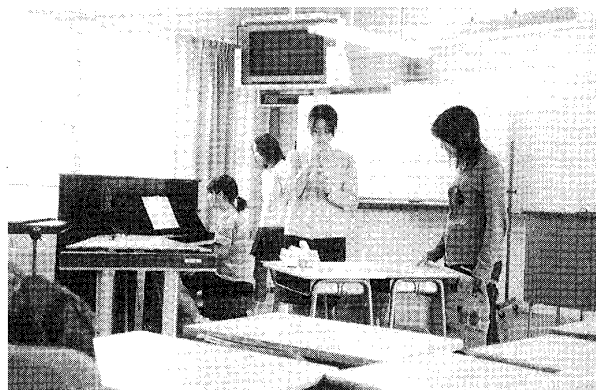
なわとび—風の音

笛—小鳥の声

上衣—鳥の羽ばたく音

鉄砲音—新聞紙で作ったおり紙をふる

写真①「ピーターとオオカミ」



方法(Ⅱ)

方法(Ⅰ)の発展として視覚と関連させ、動きを付けた。

例1—影絵(ピノキオ)

台本までは方法(Ⅰ)と同様であるが、やはり新しい方法に関しては、スタート手順が解らず思案している。またテレビアニメや絵本で培われたイメージが強いのか、図工的なものは入りやすいのか、台本の流れと関係なく作品を描きはじめている者もいたので、指導者は台本を熟読させ、必要な人物や内容に合った場面や動きなどを考えさせ、台本の流れにそった制作手順と役割りを書き出すことを指示する。

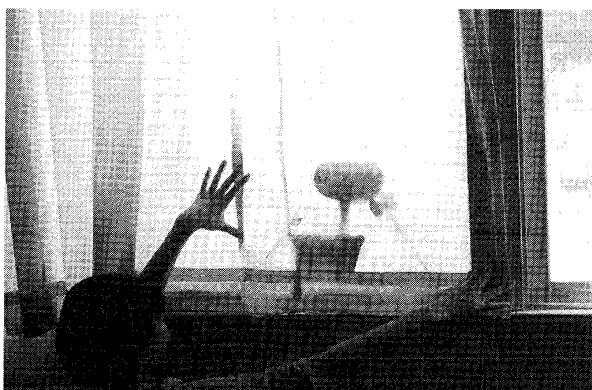
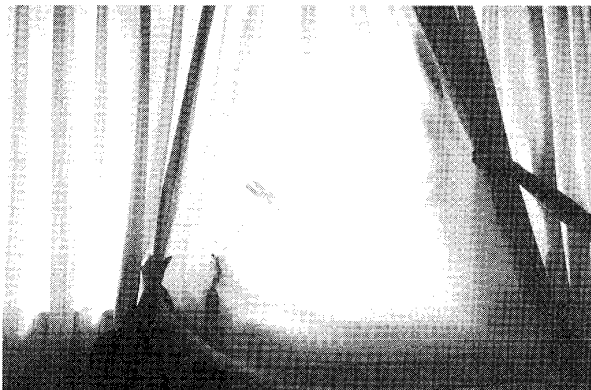
制作材料も既製の物はなるべく使用せず、身近かな物を見つけて工夫することを促す。

制作材料

トイレットペーパーの芯—影絵の額縁

海の色—ブルーのパラフィン紙

バックライト—自宅から日用大工用の大型ライトを持参使用



例2(影絵)

他のグループは、室内を見廻し、教室のカーテンの色が薄く、光が入っていることに気づき、陽の光を通してペープサートの影絵を行った。

結果と考察

方法(Ⅱ)では、方法(Ⅰ)に視覚的なものや動きが加わるのであるが、とくに紙芝居ではストーリーと絵の移り変わりの間が思うようにならない。そこで指導者が観客として一枚の絵とストーリーの流れや、その間に場面の動きを感じさせるよう他に絵を加えさせ、客観的に批評を言い、また前記の「白雪姫」のアニメ製作工程の細かい移り変わりや連携を思い出させ誘導した。

試験方法は、「演奏すること自体に演奏者の音楽的成長を刺激するということで、教育的価値のあること。」である「フェスティバル精神」に基づく方法により、各グループが全員の前で発表し、採点も指導者のみで行うのではなく、観客である学生にも採点と批評を書かせた。

この方法により、より意欲的になり各自の責任や緊張感をもち、出来上がった作品は発表したいという心理的效果を生かすべく計画した。

また他のグループの作品を観たり聴いたりする客観的教育により、自分達で気付かなかった事や、より良い方法を受けていた。そして作品の全体把握ができた後には全体の中の自分のパートの重要性を感じるようになり、ブランクの時間なども自主的に練習していた。廻りとの関連を感じず、自分の与えられた事を行うのみという傾向の若者にとって、社会的促進の一端につながろう。

前後するが、この評価基準に対しては作品の出来、不出来の評価より、いかに工夫したかということに重点をおいて評価することとした。

発表時の観客であり採点、批評者でもある

他グループ生は、体験者としての理解からであろう温かい拍手を贈っていた。

方法(I・II)を行った学生の気付きと感想

- ・ 他のグループを観て、自分達の気付きがなかった細かい工夫など大変参考になった。
- ・ グループの一体感など貴重な体験をし、大変満足であり充実した。
- ・ 音の効果を改めて知った。他の授業では得られなかったグループのまとまりの大切さと、一分担としての責任の重さを感じた。
- ・ 自己満足で行うのではなく、相手側(子供)の立場から考えることで客観的に考えることができ発展しやすかった。
- ・ 感情のもち方で一つの楽器から色々と表現できることを改めて知った。
- ・ 普段の生活の中で気付かなかった音に気付くことができ、今後の生活に役立つと思う。
- ・ 一方的に覚えるのではなく、自分の耳と体で音楽を受け入れれば、自然と音楽に入ることができることを知った。
- ・ 教えてもらうのではなく、自分で創造力を働かせて演奏するのが表現であるということが解った。
- ・ イメージに合った音を見つけた時に、自分自身も自然にその場面に入ることができた。
- ・ 考えて音を出していくうちに、音からイメージが導き出されより工夫できた。
- ・ 過去の音楽授業のように、ただ先生に言われたことをこなすのみでは自分の力にはならない。感じとることが必要であると感じた。
- ・ 改めて音楽、音の効果の大きさと重さを感じた。
- ・ 行った人だけが解り、力となり、応用力が付くのだと解った。
- ・ 与えられたものをただこなすのではなく、自分達で考え、資料を捜し準備した

りと大変であったが、はじめて短大生になった気持であった。

- ・ 一つのもので作り上げることはとても大変であることを実観した。作り上げるためには、多くの見えない作業が含まれていることを知った。
- ・ 自分達で考え、作っていくことは大変であったが、その充実感は最高であった。
- ・ 絵本は簡単なものと思っていたが、実は奥の深いことを、音を入れることにより内容を深めた。
- ・ 音の効果とともに無音の効果の大きいことも知った。
- ・ 今まで思っていた以上に自分の音楽の知識がないことに気付いた。このことに気付くまでは何げなく聴いていたが、自分で作っていくうちに面白さと難しさを知り、また音楽に対して今までと違った視点で考え感じるようになった。
- ・ 奥を読み取る力がなければ音楽にならないことを知った。
- ・ 理論は音楽を作るためのフォローでよい。やはり体験である。
- ・ すごい充実感と満足感を得られ、途中で放棄しないでよかった。
- ・ いろいろな気付きが得られ、この時間すごくよかった。
- ・ 無意識の中で音楽感を具体的にした。
- ・ 子供達が喜んでくれないのではなく、自らの工夫で喜ばせることが必要であることに気付いた。
- ・ 自分が楽しくなければ相手が楽しく感ずるはずはないと思った。
- ・ 音楽そのものが5領域であることに気付いた。
- ・ 最初の段階で今までの先輩とか、他の例を観せてほしかった。どこから初めてよいか説明では解りにくかった。しかし最初に観ると「まね」になってしまい、自分自身の創作ではなくなるかもしれないので、やはり観なくてよかったのかもしれない。

失敗と感じた学生の感想 (方法Ⅱ)

まとまらなかった。限界以上の計画であった。次回には自分達の力を見極めて計画することができると思う。今は何が身についたかわからないが、何か役立つ気持である。

感想からの考察

メディアの中のさまざまな音、音楽にひたし無意識に受けていた側から創る側になり、また設定、指導のない自分達の創造力で積み上げたプロセス体験により気付かなかった奥の洞察と達成感の感動は、音楽のもつ本来のものであり、また人間本来のものであろう。

(回答者の回答内容に関しては、内容が文章表現の違いのみで、同質であるので回答率は省略し、内容のみを記した。)

方法(Ⅲ) 童謡からの展開

幼児の発達段階における素朴な質問や疑問(知的向奇心)を想定し、童謡の弾き歌いから学習への発展、展開計画を作成し発表した。

A 学生の例

課題一犬のおまわりさん

⑩ いぬのおまわりさん

佐藤 義美 作詩
大伊 東 慶樹 作曲
伊 東 慶樹 編曲

♩ = 104

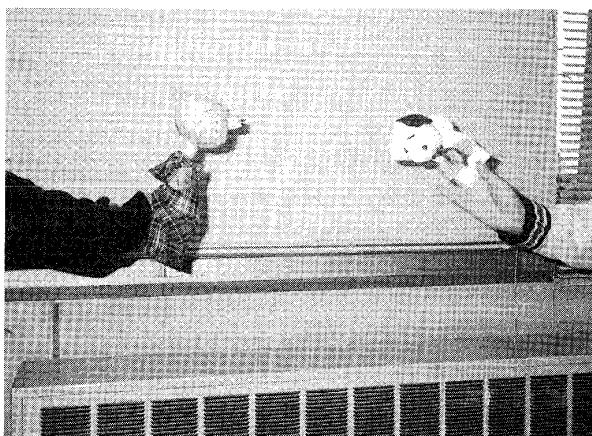
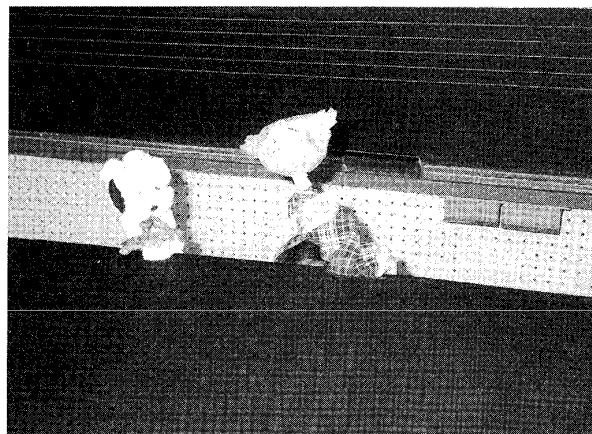
1. まいごのまいごの こねこちゃん あなたのうちは
2. まいごのまいごの こねこちゃん このこのうちは

どこですか おうちを さいても わからない なま
どこでから す にさいても わからない すず

えをさいても わからない ニャン ニャン ニャンニャン
にさいても わからない

ニャン ニャン ニャンニャン ないてばかりいる こねこちゃん いぬの

おまわりさん こまっしてまって ワンワンワンワン ワンワンワンワン



この学生は手作り人形を作り、子供達に歌詞をお話のように説明し、その後ゆっくりと人形を使って視覚的にもイメージをもたせるようにうたう。(この時点ではピアノは使わない。)人形で歌詞を誘導させながら一緒に歌うように導入する。

その後の展開を生活学習に向けて子供達に「皆は自分の名前や住所が言えるかな？お父さん、お母さんの名前は？知らない人はおぼえてきて先生に教えてね。」と応用した。

本人評

今まで童謡の弾き歌いは簡単であると感じ、自己満足で練習してきたが、内容を解らせるためにはいろいろな方向から研究し努力しなければならないことを、他の人の前で発表して気付いた。今まではピアノを譜面通りに間違えずに弾くことや声楽も発声法を中心としたとらえ方で、あくまで自己中心的な学び方であった。

今回の授業で「子供に伝える、伝わる」ことへと対象者が変わった時、譜面通りに間違えずに弾く、という小さな問題ではなく、もっと深い「内容を伝える、伝わる」ための表現法を、今回いろいろな方法を考えながら気付いた。今までにない大きな課題ができた。

(この学生は音楽高校出身である。)

参観者評

歌の音程がもっとずれてもよいから内容表現を主にしてほしい。最後の弾き歌いもピアノを弾くことが中心になっているようであった。

B 学生の例

課題「かたつむり」

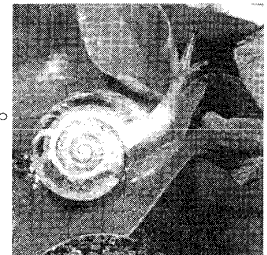
目標

「かたつむり」の生態を理解して、ゆったりとしたテンポで話しかけるように、のどかに歌う。

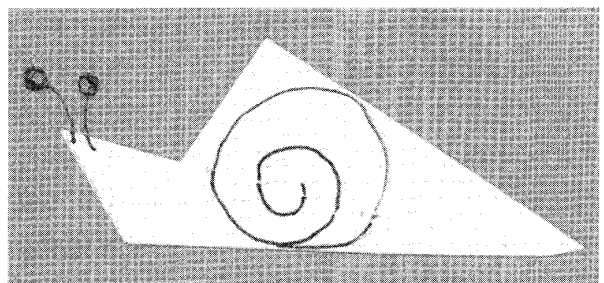
㊦ かたつむり

文部省唱歌

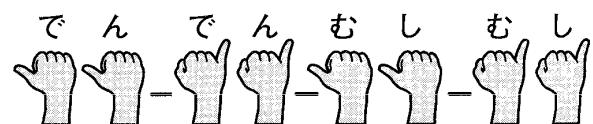
- 1 事前にクラスで「かたつむり」を飼い、関心をもたせる。(見つからない場合は、絵や図鑑などを見せる。



- 2 「かたつむり」の生態に興味をもたせるよう導く
 - ・なぜ落ちないのか
 - ・どんなどころに住むのか
- 3 折り紙をおり、その上に絵を描く



4 手遊びと歌



本人評

「幼稚園の就職試験で折り紙や絵本などの導入からやってみて下さい。」という問題が出たが、ピアノの弾き歌いから入ることでスムーズに展開できることを学んだ。また表題の内容を深めるためのいろいろな方法(研究)を改めて知り、幼児に質問された時どんな角度からも答えていけるようにしなければ、と実感した。歌からいろいろな学習に入ることや、子供の立場や発達年令を知り、すこしても向上に答えたい。

考察

この学生は「かたつむり」の歌から、観察—生態—飼い方—おり紙—手遊び—歌へと展開させた指導案を作成した。

生態の時には、飼い方を教え、「責任をもって飼わないと「かたつむり」がかわいそう。もし飼えなかったら、かたつむりの住む場所をさがして返してあげること。決してすてたりしないこと。」などの生き物への愛情、心の問題、導徳感にふれた。

方法(Ⅲ)の童謡は、誰もが子供の頃からなじんでいる曲であるが、伝統の子供の歌は「生活、心、自然、生物」などの自然環境から生まれたものであり、音楽はそれらを音で表わしたものである。という音楽の原点を改めて認識したことであろう。

ピアノ奏にむけて

ピアノの授業からの考察については、ピアノは総合楽器とも言われるように、さまざまに応用できるが、そのために確かに面倒な約束ごとの多い楽器である。内容を把握し、それに対する表現という音楽の目的に達するまでに至らないことが多い。そのためか前回の紀要中の回答にも記したが、「おもしろくない、めんどろ、難しい。」等ピアノ授業について出された。この回答は特に履修歴の少ない学生であるので、やはり音楽の文字ともいべき読譜力をつけることには重点をおかねばな

らない。短大の授業時間の少なさもあろうが、年令に関係なく音楽の初心者であるということ指導者は改めて自覚しなければならない。また履修歴の長い学生も、音楽表現の基となる音楽構成や基礎的な理論も知るものは少ない。幼児の場合は年令的発達段階として、観たり、聞いたりした実体験から受けたものを感じずるままに表現し、その積み重ねが感性として育っていくのであるが、短大生としての年令においては基礎的理論を知ることにより、より音楽が具体的、立体的になり、納得し表現するための技術にも抵抗が少なくなることが多分にある。しかし理論、技術は別のものであり得られるものではなく、音に関する要求と一緒にしか得られないはずである。音と耳で思索することを感じとり、その内容をどう表現しようかという体験により感覚を育てていくものである。前記の学生の感想、気付きの中で一学生が、「理論はフォローでよい。行って解るものであり、行ったものみの力になる。」と一体験からであるが適確に音楽の本質をとらえていた。理論と実践は別個に行うのではなく、一体とした関連付けをもって学ぶことにより、よい意味内容が結びついていくものである。

方法(Ⅳ)

ピアノの一分野からの表現展開

課題 「貴婦人の乗馬」

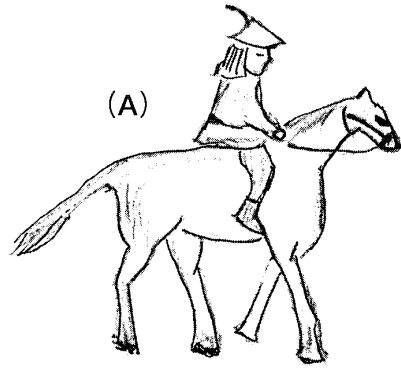
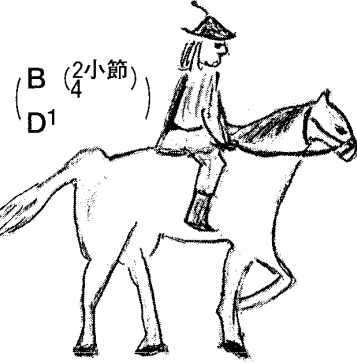
学生 3名

展開法

ピアノ奏→イメージ絵→他楽器によるイメージ音→ピアノ奏

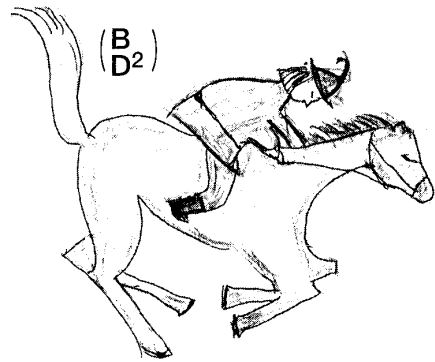
La chevaleresque
貴婦人の乗馬

A Allegro marziale (♩ = 152)
25 *p*

B *p* *f* *p*

A *cresc.*



C *p* *delic.*

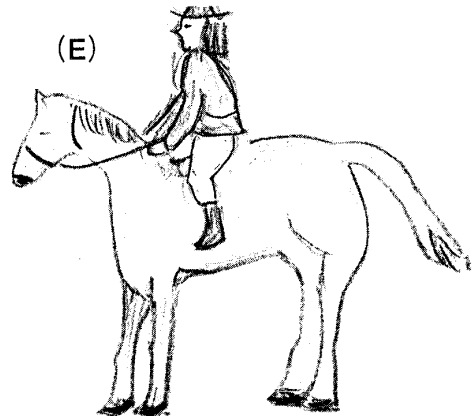


D¹ *cresc.* *p*

D² *cresc.* *f*

D³ *cresc.* *f*

E *cresc. assai* *ff*



イメージに合わせた音を他楽器で組んだ一例

①のイメージ—馬が軽く歩き出す様子

使用楽器—メロディーはピアノで弾き、低音部は木琴、ウッドブロックを使用。

②のイメージ—少し走りだしたり、歩いたりする様子

使用楽器—②1・3小節の<はエレクトーンのスウィングで盛り上げ、2・4小節はピアノを使用。

4段目は最初①と同じ。

③のイメージ—軽やかに周りを駆ける様子

使用楽器—3連符のメロディはリコーダーやマリンバを使用
低音部の全音符はエレクトーンのベース
4分音符は鉄琴を使用。

7・8段は①と同じ

④のイメージ—走りはじめ、④²・④³と疾走していく様子。

使用楽器—④1の2小節のメロディーは木琴で表現し、3小節の2拍目から4小節目はリコーダーで表現する。
低音部は木琴のみ。
④²はピアノのみで表現。
④³の2小節16分音符は高音部をピアノ、低音部はエレクトーンのスウィングでかけ合い、3・4小節は高音部をピアノ。低音部はスウィングで *cresc, assai* し5・6小節は使用楽器全部を使用し *ff* を出し、終る。

ピアノ奏

前記の他楽器での応用では、固定された指導ではなく自己の観賞のままに工夫し現わすことに生々として行っていた。

イメージ音を工夫した後、独奏させた。自分自身で思考し、内的に体得したのであろうか、譜面上の原型に集中し、言葉で内容説明しても、記号としての *ff*、*P*、であることにとどまっていたものが、前述の学生の感想で「一楽器から気持で色々な音が出せることに気付いた。」と音楽の根本を的確に気付いていた。

一譜面の中には諸々の内容や場面が含まれている。この型を変えた方法により譜面の奥を真に感じ、正確に弾くという表面的な構えではなく、自分自身のイメージを中心とした演奏をし、聴いていた学生も「感じが出ているよ」と拍手をし、一楽器から諸々の音を表現しようと真剣に、しかし楽しんでいた。

その後表現のための技術の必要性に気付くであろう。

まとめ

音楽教育が見直され、技術偏重から改めて音楽の本質を提唱すべく「表現」として創造性、独創性などの感性を育てることを目的として研究されている。

現代の若者の、与えられ、指導されてきたためか、受動的であり自主性、創造性が弱く、安易に即応性を求める気質の学生が多い。しかし反面、メディアで与えられ育った視聴覚は優れていることを感ずる。その身近な環境の中で培われながら無意識である感性を、幼児の発達の援助者を目指す学生自身が、短い期間の一音楽授業からではあるが、なにを気付くか。そして気付きからいかに工夫できるか。諸々の体験から潜在的に養われている感受性を実践により、どこまで自覚できるかを考察してきた。

どの方法もあくまで学生の自己を中心とした授業ではなく、対幼児を対象としたイメージ、または相手側からの視点という客観性をもって考えていくよう指示した。

今回の方法については結果の良し悪しではなく、いかに独自で考え、工夫したかを評価することと、楽器のみに頼らず身近な物を利

用するようにも指示した。

また指導者自身も指導形態は取らず、幼児の年令的発達段階のものとして質問や、誘導、アドバイス等で学生自身に気付かせ、考えさせる方法で進めた。(設定教育ではなく、自由教育の方法である。)

音楽教育の本質、目的は過去も今日も変わらないはずであるが、保育現場においては、自由と放任の区別のない保育や、また既成の音楽教材が氾濫し、既成の教材のみで行い、子供に合わせさせている。ということも時折耳にする。(一部の現場であろうが)音楽の本質、音楽教育の目的を理解し、適した方法を研究し使用すべきである。適した方法で教材を応用するならばより効果的になるであろう。

今日のカラオケも自分の感情表現ではなく、出来上ったリズム、テンポにのり歌詞の内容を「共感する対象」としての安心感や、情動に酔い、一時的にストレス解消として癒しにしている。また「ヒーリングミュージック」も多く出ている。それも時にはよいであろう。

今回の学生の感想、気付きの中の

- ・ 見ることと、行うことの違い、行うことの難しさ。
- ・ 一つのものを仕上げるための見えない多くのものの発見。
- ・ 行ってこそ解る。行った者のみに力がつく。
- ・ 相手側を想って行ったら解りだした。
- ・ グループの一体感の喜びと満足、充実感は最高。
- ・ 見えない奥を読みとる力が必要。
- ・ 音楽は五域領そのもの。
- ・ どの分野にも責任がある。

などの感想からの考察として、少しの体験からではあるが、指導されて行うのではなく、自らの自発性、創造性が自己の存在を感じ、自立という喜びと満足感を実感したのであろう。

このプロセス体験が「生きる力」の一端を言わずとも感じ取っているのではないか。

方法(I~III)の発表の時、他のグループの工夫に対する感嘆の声や、温かい拍手はプ

ロセス体験で得た難しさ、深さを知った者のみに解る思いやりを感じ、感想のどれもが、この音楽体験から幼稚園教育指針を無意識ながら感じ取っている。

最後にピアノ教育においても、一分野の楽器としてとらえるのではなく、いろいろな体験をさせて一楽器に含まれる諸々の音の意味を理解することができるのである。

感想の一つに、「感情のもち方で一つの楽器からいろいろと表現できることを改めて知った」と述べた学生もいた。

「音楽を生み出すことがどんなに楽しく大切なことか。それはその者のレベルにかかわらず・やりとげた者のみが解っていることである。その精神満足が音楽教育の一步であり、それは音楽家を育てる教育でなく人間教育である。」

「スチョムリンスキー」音楽の基本姿勢より。

指導され、またほとんどの物が与えられ、「今の若者は何も出来ない、発想がないと言われるが、それは出来ないのではなく、出来上った中に育ち、自らを生かす場を与えていないのではないか。」

今回の考察から改めて

「考える力は教えて養えるものではない。」ことを実感した。

そして今回の「気付き、感想」から、音楽教育の本質をとらえていることは想像以上であった。

参 考 文 献

- J・L・マーセル著
「音楽的成長のための教育」
「音楽教育と人間形成」
- J・L・マーセル、M・グレーン著
「音楽教育心理学」
- F・W・アロノフ
「幼児と音楽」
- キース・スワンウィック
「音楽と心と教育」
- 文部省 「幼稚園教育要領」